

# 「高校生の自ら考えて書く力」の育成

## ー日本史における実践と適応指導教室での活動からー

学籍番号 (159985)  
氏 名 (山本 健太郎)  
主指導教員 (中西 修一)

### 1. はじめに

不登校は各教育段階において課題とされてきたが、義務教育段階を離れた高等学校に対しては、近年になって行政が施策に取り組んでいる。その中で筆者は今後、高校生の不登校を支援する施策として教育支援センター（適応指導教室）が設置されると考えた。その中で、適応指導教室に通室する場合、生徒は在籍校から提供された学習教材を使い自習を進めることになるだろうと予測する。その際、在籍校は通室する生徒に学習教材を用意することが求められる。しかし現状は副教材であるワークや授業プリントの穴埋め、教科書の書き写しなど作業的な課題が出されていることが多いため、学校復帰のための「学習支援」となっているか疑問である。

本研究の手順は、まず実習校であるA高等学校において適応指導教室に通室する生徒への学習支援の実態を調査した。次に適応指導教室に通室する生徒の学習支援・学校復帰の方法として「書くこと」に「考える」ことを加えた教材開発に取り組んだ。最後に、A高等学校の生徒も「考えて書く」ことを苦手としているため、黒上（2013）の「思考（シンキング）ツール」を用いた教材が「考えて書く力」の育成に繋がるか検証した。

### 2. 実践 I（基本学校実習 II）

基本学校実習 II の目的は「適応指導教室に通室する生徒に対して、在籍校の担任や教科担当者が行っている学習支援の実態を明らかにすること」である。大阪府は平成 23 年度から高校生を対象とした適応指導教室を開室している。大阪府教育センター（2013）は適応指導教室の設置の目的として「心理的な要因等により教室への入室が困難な状況にある生徒に対して、学校生活への適応を促し、教室への復帰を援助するため」としている。また取り組みのポイントとして学習支援等は、在籍校と連携していくこととなっている。

基本学校実習 II では、在籍校が実際にどのような学習支援を行っているのか明らかにするため、A高等学校で適応指導教室に通室する生徒の担任や教科担当者に対して聞き取り調査を実施した。その結果、担任に求められている役割は、学習支援より本人・保護者・学校・適応指導教室を繋ぐ「連携」役であることがわかった。一方で教科担当者に求められる役割は、適応指導教室に通室する生徒へ課題を提供することであった。課題の内容としては、プリントや副教材の問題集、教科書のまとめなど「書くこと」が中心のものであることがわかった。しかし適応指導教室の生徒が行っている「書くこと」には「考える」ということが少なく、作業的に「書くこと」で課題を進めているように感じた。

### 3. 実践Ⅱ（発展課題実習Ⅰ）

発展課題実習Ⅰでは【適応指導教室に通室する生徒へ「自ら考えて書く力」を取り入れたプリント教材を提供する】【実習校であるA高等学校において「自ら考えて書く力」の育成に取り組む】の二つを実習の目的とした。

細山（2013）は「考えることによって使う力」において、問題や学習課題を明確にし、解決のために情報を収集する活動〔INPUT〕、結果を表現する活動〔OUTPUT〕、そしてその間で学習課題を解決するため情報を処理する活動〔PROCESSING〕の中で「書くこと」がそれぞれの活動で必要であるとした。筆者は、考えることの3つのプロセスにおける書く活動を育成することが「自ら考えて書く力」であると考えた。

結果、資料活用の際には「PROCESSING」の部分を意識した授業を行わなければならないことがわかった。必要な情報を収集する〔INPUT〕はできるが、その情報を分析し、処理する〔PROCESSING〕の部分に苦手を感じている生徒がおり、結果を表現する〔OUTPUT〕までたどり着いていなかった。

### 4. 実践Ⅲ（発展課題実習Ⅱ）

発展課題実習Ⅱでは「思考（シンキング）ツールを活用した自ら考えて書く力の育成」を目的としている。発展課題実習Ⅰでは授業と考査を通して、生徒の学習課題を解決するため情報を処理する活動〔PROCESSING〕が弱いことがわかった。よって本章では、黒上および田村（2014）の「思考」を〔PROCESSING〕と捉え、思考を手助けする「思考（シンキング）ツール」を取り入れた授業を行い、生徒の「自ら考えて書く力」が育成できたかを検証する。

筆者はこの黒上および田村（2014）の「思考」の四つのフェーズのうち、【フェーズ3】の「材料を組み立てる」と、細山（2008）の「学習課題を解決するため情報を処理する活動」〔PROCESSING〕が繋がると考えた。【フェーズ4】の「考えた結果を表す」に至る前の情報を処理し、再構成する部分に、まず取り組むべきだと考えた。そして思考を進める手順やそれをイメージさせる図や表として表している思考（シンキング）ツールを活用し、「自ら考えて書く力」が育成することができたかを探った。結果、思考（シンキング）ツールは、資料活用の〔PROCESSING〕において有効的であることがわかった。

### 5. まとめ

A高等学校から適応指導教室に通室する生徒がいなくなってしまったことから、「自ら考えて書く力の育成」が、適応指導教室に通室する生徒の学習支援に繋がるかどうかの検証は今後の課題である。

一方で「自ら考えて書く力の育成」においては、思考（シンキング）ツールを活用することが有効である可能性を示せた。しかし今回示した思考（シンキング）ツールの在り方は、まだまだほんの一部に過ぎない。思考（シンキング）ツールは、協働的な学びにおいても大きな力を発揮することが期待されていることもあり、政治経済の分野などでも広く活用できることが考えられる。今後も、筆者の授業においては、思考（シンキング）ツールを積極的に活用し、思考（シンキング）ツールの持つ多様な可能性を検証していきたいと考えている。